

学位請求論文概要書

諸星和夫

論文題目：シメオン・ポーロツキイと『韻文詩篇』（1680）

— 作品の成立に関わる文献学的ならびに文芸社会学的考察

本論文の目的は、17世紀のロシア詩人シメオン・ポーロツキイ（1629-1680）最晩年の作品『韻文詩篇』（1680）の生成過程について、文献学的ならびに文芸社会学的観点から考察することにある。執筆に際してとりわけ注意が払われたのは、本作品の意味論を、従来の特定国民文学研究の枠組みを越えて、それを成立せしめた国内外の社会的かつ歴史的諸条件を分析することによって確定しようとしたことである。

もとよりすべての文学作品が、かかる手続きによって成立の内実を開示するわけではない。たとえば、その制作年代が現代に近づき、作品自体の構造や創作手法への関心が高まるにつれ、この種の探求は、あるいは簡略化され、あるいは割愛され、最も極端な場合には、研究ノートの最初の数葉を埋めるに過ぎなくなる。そこでは、狭義の作品論や方法論が内容上の第一義を占めているので、それよりもマクロのレベルにあると見做される同時代の社会の動向や歴史現象は、相対的な価値を減じしめ、欄外に追いやられるか、背景に退かざるを得なくなるからである。

本論で取り扱う時代においては、作者と作品との関係性については言うに及ばず、ことに作者と受容者との相関が未だそのような段階に至っていない。ここでは、作品の表象上の意味は、フィクションの体を取ろうと取るまいと、ほとんどの場合、なお両者を取り巻く社会的背景や歴史的動機に密接に関連づけられているからである。確かに、この時代を幅広く覆ったバロックは、創作者が素材をいかに挑発的に組み立てるのかを問題にする様式のひとつであり、一見、現代芸術に通底する側面を有している。が、実際には、この種の芸術的創造物は、ある意味で、ほとんどすべてが当時の現実を相手取った修辞学の変種だった。しかも、その説得技術は芸術家自身が実践者ではあるが、彼らはどこまでもその代行者であり、これを実際に切望したのはあくまでも彼らの雇い主たちである。しばしばパトロンとかメセナとか呼ばれるこれら雇用主は、作品制作の一切を作者に委ねつつも、必ずしも自身が一個の作品を純粹に見たり、聴いたり、読んだりしたわけではない。むしろ、彼らは、自分以外の他者に対して、創作者を仲立ちにして、それを見せ、聴かせ、読ませることに最大の関心を寄せていたのである。社会が俄かに流動化し、それぞれの利害が鋭角的に対抗し始めた結果、そこでは巨大な富や権勢を後ろ盾にして、名だたる競合者たちの権威や主張を誇張的に表象するための手段と実践者が求められた。

一方、ロシアでは、他のヨーロッパ諸国と異なり、バロックは未だ西方ロシアやモスクワ入りした知識人の例外的な専有物に過ぎなかったが、本論で取り上げるシメオン・ポーロツキイの場合、パトロンは言うまでもなく時のツァーリその人と僅かな取り巻きであり、この詩人もまたひとりのアルティザンとして、彼あるいは彼らの同様の期待や要求に応える責務を負っていたのである。

詩人が身を投じた現実には、前世紀に勃発したりヴォニア戦争後に齎される。それは、爾後に発現した王朝の断絶と動乱時代を経て、バルト海への進出に見切りをつけたロシアの対外戦略が、俄かに南方戦線へシフトした結果だった。かかる状況の変化は、早々16世紀の後半に露呈するリトアニア大公国の危機意識と、その後には不可避的に成立するジェチポスポリータの台頭によって喚起される。この連合国家、とりわけその中核を占めるポーランド王国が、その成立時に大公国のウクライナ領を併合したことにより、隣国ロシアを刺激する新たな火種を宿してしまっただけからである。ここに正教勢力に教会の合同を持って切り込もうとする対抗宗教改革時代のイエズス会やこれを阻もうとして発生する都市単位の兄弟団、劣勢となった改革派と正教会の連携、地政学的なバランスを喪失した結果としてのザポロージェ・コサックの反乱、これに誘発されたモスクワのウクライナへの介入などが相次いで絡んでくる。正教会側の仕掛ける啓蒙と互助組織としての兄弟団の活動は、やがて過激化して膠着・弱体化するが、その後、ペトロー・モヒラの典礼改革とそのキエフ・コレギウムがひとつの新たな範例を示す。この動きに関連づけられた一連の企ては、いずれも同地域における正教会のアイデンティティーを担保し、その溶解を阻止するための妥協的な措置であったが、『韻文詩篇』の作者シメオン・ポーロツキイの教養基盤は、当初、かかる西方ロシアの流動化の過程で生まれ、一方、その創作活動は、詩人の生まれ故郷ベラルーシのポーロツクに始まり、その後、クレムリンへと引き継がれる。いわゆるニコンの改革はこの間に断行されたが、モスクワ上京後の詩人が最初に拝命した仕事のひとつは、60年代の半ばを過ぎてもなお物議をかもし続けていたこの改革に明確な形式を与えることだった。重要な点は、この前後に、詩人の文芸活動に大転換が起こり、その使用言語がポーランド語とラテン語から教会スラヴ語に転じたことである。従って、シメオンの活動をモスクワの宮廷詩人となった地点から出発させれば、その歴史観や文芸手法を培ったこの人物のきわめて特異な文脈が丸々書き落されてしまうのだが、従来のこの詩人をめぐる縦割りの国民文学的研究は、一言で言えば、そのようなものだった。かかる発想法は、当然、『韻文詩篇』の理解や評価にも影響を及ぼさざるを得ない。本論はいわばそのようなステレオタイプ化された詩人像に改めて疑問を呈し、同作品をめぐる旧来の評価と理解に抜本的な修正を求めるものである。本主題に通底するもうひとつの視点は、いわゆるフィレンツェ公会議理念の長きにわたる影響と反響についてである。同理念のにもべもない拒絶は北東ロシア国家に物心両面の鎖国を迫るほどに衝撃的なものだったが、こ

れが17世紀に至り、シメオンの後半生の活動にどのような形で結びついているのかについても、従来の伝記作者や研究者たちがほとんど語らないところである。本論では、標記の主題を解決するための枢要な視座のひとつとして、とりわけこの問題の掘り下げに腐心した。

『韻文詩篇』の作者たるシメオン・ポーロツキイは、もとより多面的な活動家であり、宮廷詩人であるとともに、説教者でも出版人でも教育者でもあったが、それらはすべて爾後のモスクワが推進しようとしていた前期近代化のプロセスを詩人自身が先取りしていた点に特色がある。シメオンはそれを明らかにペトロー・モヒラの典礼改革をめぐる一連の企てと戦略から学んでいる。両者の異なる点は、モヒラがジェチポスポリータ領内における正教会の生き残り策に生涯を捧げたのに対して、シメオンはかかる方法論をとりわけ動乱以降に痛感された北東ロシア国家の諸課題に適用し、それをモスクワによる正教文化圏への回帰の起点として活用しようとしたことである。詩人が自らの使命や役割を最大限に意識していたことは間違いない。今様に言えば、シメオンは、アヴァクームやニコンと並ぶ、あるいはそれ以上の、この時代のロシアを代表する巨大なインフルエンサーのひとりだった。その詩人を中核で支えていた表象手段あるいは戦略の実体がほかならぬシメオン・ポーロツキイのバロックであったと考えられる。

各論の解題に移る前に、改めて本論の構成を俯瞰しておきたい。すでに目次に見る通りであるが、いまいちどその陣容を確認する。

0 『韻文詩篇』研究への道（まえがきにかえて）

I シメオン・ポーロツキイ研究の歴史と課題

— 古典化の経緯と『韻文詩篇』の取り扱いをめぐる問題点について

II 背景の理解

1. ヤコブ・ウルフェルトの記録と記憶

— 1578年のモスコヴィア事情

2. 風景の意匠

— 16-17世紀におけるモスクワの都市景観について

3. 16-17世紀におけるロシア・ポーランド関係

(1) 16世紀におけるロシア・ポーランド関係

— フィレンツェ公会議理念の影響を中心に

(2) 17世紀におけるロシア・ポーランド関係

— ウクライナ動乱の反響あるいはフィレンツェ公会議理念の転位について

Ⅲ 17世紀のロシアにおける「ポーランドの影響」について

— 西方ロシア知識人の役割を中心に

1. 17世紀におけるロシアとポーランドの文学関係
2. 西方ロシアの啓蒙とキエフ・コレギウム
3. 西欧物語文学とウクライナ
— 17世紀のスラヴ文学関係史におけるミッシングリンクについて
4. 西方ロシア知識人とモスクワ
— ニコンの改革の起源について

Ⅳ シメオン・ポーロツキイの世界

1. 「シメオン・ポーロツキイ」への階段
(1) 西方ロシア時代の遍歴と創作
(2) モスクワにおける西方ロシア文化の活用と実践
2. ロシア・バロック文学の概念あるいは統一への意思について
3. シメオン・ポーロツキイと近代詩人像の起源
— マチエイ・サルビェフスキの『詩学講義』の影響を中心に
4. シメオン・ポーロツキイとサルマチア理念
— 詩人の創作における「ツアーリ」の概念の変容について

Ⅴ 『韻文詩篇』と西方ロシア文化

1. 『韻文詩篇』の濫觴
— 序文で回想されたいわゆるポーランド語韻文訳詩篇について
2. 『ダヴィデの詩篇』とプロテスタンティズム
— 作品の受容をめぐる若干の考察
3. カリオペイアの誘惑
— 『ダヴィデの詩篇』の成立に関わる文芸社会学的考察
4. 越境と記憶
— 17世紀の東スラヴにおけるポーランド語詩篇歌の流行について

Ⅵ 『韻文詩篇』の成立と戦略

1. 古代ロシア人と『詩篇』
— 『韻文詩篇』以前の伝統と習慣について
2. 『韻文詩篇』のテクストロギア
— 刊本テクストの生成に関わる自筆草稿ならびに

ふたつの写本の位置づけについて

3. 『韻文詩篇』と17世紀後半のロシア社会

— 作品の成立に関わる国内要因について

4. 『韻文詩篇』の出版と戦略

— ふたりの兵士の比喩あるいは作者が口絵の差し替えで示唆したものについて

シメオン・ポーロツキイ年譜

あとがき

参考文献一覧

別巻資料 『韻文詩篇』テキストの研究

— 諸本の校合と対照表による依存関係の俯瞰

目次から見る本論文の構成はくだんの如くである。これを最初に大枠で捉えておくと、本論の枢軸を占めるのはⅢからⅥにかけての諸研究である。一方、ⅠおよびⅡのとりわけ第3章は、本研究の展開にとってその前提となるきわめて重要な事項を扱っている。一方、目次の最後に置かれている「別巻資料」は、Ⅵの第2章の主題（『韻文詩篇』のテクストロギア）を扱う際に必要とされる基礎研究の結果を開示するが、閱讀上の便宜を図るために、これを別立てとしたものである。次に0からⅥについて順次説明を加えて行く。

まず、0の「『韻文詩篇』研究への道（まえがきにかえて）」では、本研究の出発点となる主題の発見やその後の作業の経過が記述されている。ここで明らかにされているように、本論は最初から明確な主題設定のもとに展開されて行ったものではなく、その都度獲得された知見や経験の蓄積によって次第に変容を遂げたものである。とりわけ重要な点は、当初模倣論の観点から着手された『韻文詩篇』研究が、まもなくその限界に突き当たり、その欠を補うために、文芸社会学的な視点が導入されるに至ったことである。研究の新たな地平は、より具体的には、過去に東西教会の合同を策したフィレンツェ公会議理念の影響と反響を検証することによって開けてくる。周知の如く、同会議の決裂は爾後の東ヨーロッパ、とりわけロシアに物心両面で計り知れない弊害を齎した。これは西方ロシアでもほぼ同じことが言える。実は、『韻文詩篇』の作者は、長い歳月を隔てて、なお途切れることなく続く歴史の潮流に巻き込まれていたであり、その結果、かかる時代認識がその作品理解のための必要不可欠な視座として浮かび上がってくるのである。

Ⅰではシメオン・ポーロツキイの古典化の経緯を振り返り、併せて、本論の

中心課題である『韻文詩篇』研究の展望を示す。詩人自身、ヤン・コハノフスキの『ダヴィデの詩篇』を所蔵し、制作中もこれを参照しているにも関わらず、作品はなぜその特徴たるパラフレーズを拒否しているのか。これが『韻文詩篇』に纏わる最初にして最大の謎である。加えるに、作品はなぜ口語ではなく書記言語で書かれているのか。また、詩人はなぜそのような硬質な言語で書かれた韻文訳詩篇をあえて一般の正教信徒に歌わせようとしたのか。最後に、作品はなぜすでに完成しかけていた『にしきなす花園』の制作過程に割って入り、その後、これを差し置いたまま上梓されるに至ったのか。作品の意味論はこれらすべての疑問に解答が与えられた後に明らかにされよう。本章前半ではシメオン・ポーロツキイをめぐる受容と研究の歴史を辿り、各時代における関心の持たれ方についてその傾向と特色を記述している。本格的な研究は、1950年前後にИ.П.エリョーミンによって先鞭がつけられ、その後、バロック文学研究の高まりとともに80年代を境に飛躍的な発展を遂げたことが確認される。一方、『韻文詩篇』への関心は、とりわけ詩人没後の18世紀の半ばに顕著であった。その後、長い時を隔てて19世紀の末に、H.スミルノフとH.グロツケが主に模倣論への関心から筆を執っている。この時両研究者の念頭にあったのがヤン・コハノフスキの『ダヴィデの詩篇』だったのである。

Ⅱの第1章では、「背景の理解」の一環として、デンマークの外交使節ヤコブ・ウルフェルトの見た16世紀のロシアの現実を追体験している。往時のロシア事情をめぐるこの種の記録や覚書は枚挙に暇がないが、あえてウルフェルトのそれを取り上げたのは、それ自体きわめて史料的价值が高く、なかんずくフィレンツェ公会議後のロシアの現実を象徴的に開示しているためである。この時代のロシアは完全に孤高の存在であり、記録の端々にかかるロシアのイメージが巧みに鑲められている。状況は17世紀に引き継がれ、半世紀後、シメオンらはラスコールを確定させ、詩人自身、この文化的閉鎖性との死闘を余儀なくされる代表的な知識人のひとりとなる。

第2章の「風景の意匠」では、くだんのウルフェルトの体験に16-17世紀に至る都市モスクワの変容ぶりを重ねた。印象的なのは、モスクワが要塞から都市への佇まいを備えて行った時、その中心部に当たるクレムリンがこれから分離してツァーリとその家族ならびに高位聖職者のみの空間と化して行くプロセスである。巨大にすぎる権力が都心を空洞化させた典型的なサンプルのひとつで、フランス人地理学者ブラーシュも指摘するように、モスクワはついにそのクレムリンを「併合消化していない」のである。17世紀の30年代、そのクレムリンを幾重にも取り囲んだ末に出現したのは中小の手工業者や西方ロシアからの流民がひしめき合って暮らすゼムリヤノイ・ゴーロットだった。これは前世紀にはスコロドームと呼ばれていた区域である。その境には土塁と矢来が築かれ、古くからの都市住民を保護していたが、すでにその向こう側には日々新たな流民が押し寄せて来ていた。果てしなく膨張する都市モスクワの変容は、かくて

イワン 4 世ですら成し得なかったツァーリの権力の肥大化を促し、かかる胎動が側近たるウクライナ鼻頂のルチーシチェフや有力聖職者ボニファチエフらの台頭を許しながら、孤高のモスクワに蟠る物心両面の負荷の解除に向け、ニコンの改革やシメオンの多岐にわたる活動を不可避的に推進して行く。

第 3 章では本論の爾後の展開に欠かせない 16-17 世紀におけるロシア・ポーランド関係を取り上げ、実際にフィレンツェ公会議理念がどのような経過を辿って生き続け、機能していたかを概観している。

周知のように、16 世紀にはバチカンとハプスブルクは時に共闘し、時に独自の戦略により、対オスマン戦略のためのロシアの誘い出しに努めていた。同世紀の初頭に二度の訪露を果たしたジギスムント・フォン・ヘルベルシュタインは後者の、1581 年にロシアを訪れ、支配者の老獺さの故に西方ロシア限定の合同教会を仕掛けた A. ポッセヴィーノは前者の使節だった。いずれもがポーランドとロシア両国間の休戦条約を取り持ち、ヘルベルシュタインはロシアとポーランドを含む数か国を、ポッセヴィーノは、それによってロシアひとりをオスマン一国に対抗させようとしている。訪露の折、ポッセヴィーノがツァーリに対して教皇から言付かったフィレンツェ公会議の一件書類を手渡しているのは有名な話である。この二人以外にも 16 世紀には何人もの有名無名の使節がほぼ同じ目的で活発にモスクワとの外交を展開していた。合同教会は、しびれを切らした末にポッセヴィーノが撒いた前代未聞の混乱の種であったが、この悲劇の幕開けがこの地に幾多の兄弟団学校を発生させ、知的覚醒を促し、啓蒙の初期の砦を連綿と築いたことは思わぬ成果だったと言えよう。

かくて、シメオン・ポーロツキイが生きた 17 世紀前半の西方ロシアは、なお前世紀末に起こった合同教会の流れを受ける形で推移しなければならなかった。過激な兄弟団学校の後を襲った名高いキエフ・コレギウムは、そのような喫緊の課題を解決に導くための処方箋の役割を果たそうとした正教徒のための唯一の高等教育機関だった。とはいえ、同コレギウムは成立の経緯から大枠でジェチポスポリータの意向に沿うものでもあったので、ここにもすでにフィレンツェ公会議理念の残像の如きものが知らず知らずのうちに忍び寄っていたと言える。一方、同世紀後半、長きにわたって反目し合っていた両国の間に一見奇妙な共闘戦線（アンドルソヴォ休戦条約）がひとりの仲介者もなしに自律的に成立するのは、ウクライナ動乱を契機として、両者の視界にオスマン・トルコの影が避け難く介入してくるためである。論者は、今やポッセヴィーノの思惑通りになったか見えるロシアの動向を追い、旧来の公会議理念がどのような転位と展開を見せて行ったかをトレースしている。

Ⅲには 4 本の論文が収められ、以後のシメオンの活動に直結する、あるいは、その前提となる 17 世紀のロシアにおけるいわゆる「ポーランドの影響」について検討が加えられている。

第 1 章では同世紀における両国間の文学関係について論じている。17 世紀の

ロシアでは、ポーランドの影響は、多くの場合、西方ロシアを介してのそれであり、主に同地域の出身者や同地域に精通したモスクワの知識人によって齎される。話題を文学に転ずれば、受容された作品に纏わる重要な特徴のひとつは、それらの多くがポーランド独自の文学作品というより、その時点で後者が伝えていた西欧物語文学であったことである。その際、これらの物語には慎重にカトリック色の希釈化が図られた跡が見え、これもポーランドのオリジナルな作品が退けられた原因のひとつと考えられる。例外的なのは前世紀に活躍したヤン・コハノフスキの諸作品で、現にロシアでは明らかに聖歌集から採られたキリール文字による抜き書き、『ダヴィデの詩篇』や『フラシキ』など、当地の人々の読書体験を裏付ける写本が何部か発見されている。

第2章では西方ロシアの啓蒙運動とキエフ・コレギウムの役割について論じている。後者はシメオン・ポーロツキイが実際に教育を受けた現場であり、その意義は改めて正確に把握しておく必要がある。その際、ことに留意しなければならないのは、しばしば混同されるいわゆる兄弟団学校とキエフ・コレギウムの性格づけの問題で、両者がむしろ正反対のベクトルを持っていた事実である。当のシメオン自身は後者に連なり、これが詩人のモスクワでの活動を担保するとともに、同時に、異端者すれすれの危うい立場に追い込んでしまう原因のひとつになる。同コレギウムはもとよりイエズス会系の教育機関に範を取り、出身者のステータスは、いわば身を捨てて実を取る方法論の上に築かれていたからである。これをあえて採択したのは創設者のペトロー・モヒラにほかならない。学園運営のすべては、そのプラグマティックな裁量に負っていたのである。

第3章はウクライナにおける西欧物語文学の特徴と傾向を扱っている。この地のポーランド文学を基盤とする翻訳活動は、きわめて実践的な性格を帯び、主に説教の素材として活用されたために、モスクワ以上に割愛されて伝播する形が多く採られた。その性格上、ポーランド語があからさまに混在していたのも特徴のひとつである。従って、このような実用を旨とする断片乃至梗概は、純粹な文学作品としては受容され難く、モスクワがそれを翻訳の基礎に置かなかった根拠のひとつになっている。以上は当地で教育を受けた知識人とは対照的に、いわゆるポーランドの影響が、ダイレクトにモスクワまで浸透せず、その大半がこの地に滞留してしまった原因のひとつである。

第4章ではニコンの典礼改革の起源をペトロー・モヒラの諸改革にまで遡って検証している。間接的な契機のひとつとなったのが世紀の半ばに勃発したウクライナ動乱で、ほかならぬこの地域へのロシアの介入こそが、その前段階としてのニコンの改革を促したと考えられる。同典礼改革は結果的にロシアが積年の孤高を振り払い、ウクライナを経由して再びビザンツの伝統に回帰するための捨て身の戦略だったと考えられるからである。時間的にはずっと後のことではあるが、シメオンはここでも重要な役割を果たしている。西方ロシア出身

の詩人は、モヒラの諸改革の最も熱心な継承者のひとりであったが、だからこそ、ニコンの改革の事後処理ではそのための「儀式」の影の主宰者たり得たのである。一方、当のモヒラ自身は、これとは全く別の文脈で諸課題と取り組んでいる。モヒラが望んだのは、連合国家の中に彼の地の正教会を序列化されることなく並列的に位置づけることで、そのためにはバチカンとの交渉すら厭わなかった。この章では、以上のほかにも、同時代の東方正教会で隠然たる影響力を誇示したモルダヴィア大公ワシレ・ルプの野心と役割、そのルプの手足となって暗躍するエルサレムの総主教パイシオスの事績について言及する。いわば本主題の最も興味深い部分で、ニコンの改革は、ウクライナ動乱を契機にしてルプとパイシオスが働きかけ、これに同調したルチャーシチェフやボニファチエフらが断行した合作だったことが知られる。

IVの第1章ではシメオン・ポーロツキイの伝記とその指標となる詩人の考え方を考察の対象とする。伝記的には、それまでポーランド語とラテン語の書き手であったシメオンが、モスクワ上京後に教会スラヴ語の使い手に変貌する経緯がいかほどの飛躍であったかを強調しようとしている。この想像を絶する巨大なエネルギーの実体は何だったのか。そこに思いを馳せることさえできれば、未だその大半が歴史の古層に埋もれたままの、この人物の器の比類さを理解することは存外に容易であろう。第2章ではシメオンの抱懐したバロック文学の概念が、第3章ではその創作方法に礎を与えたマチェイ・サルビェフスキの詩人観や講義録の影響が、第4章では旧来絶えて取り上げられることのなかった詩人とサルマチア理念についての問題が分析の俎上に乗せられる。この問題は、本来がポーランドあるいはジェチポスポリータ側の理念であったサルマチズムを、シメオンが巧みにロシア側の戦略手段に変換してしまった事実に着目、その意味を探っている。

VとVIでは『韻文詩篇』の生成過程を様々な角度から詳らかにしようとしている。

Vで問題となっているのは同作品成立の起源で、その舞台はウクライナを中心とする西方ロシアとポーランドである。第1章では作品の成立に大きく寄与したとされるシメオン自身が西方ロシアで耳にしたポーランド語訳詩篇歌の実態に迫ろうとしている。この歌は先験的にコハノフスキ詩篇(=『ダヴィデの詩篇』)のそれを連想させ、現に多くの研究者が今もって混同し続けているが、実際にはプロテスタント陣営が展開する聖歌集の一節であった蓋然性が極めて高い。この仮説は、一方で、コハノフスキ作品に旋律をつけたミコワイ・ゴムウカの詩篇が不人気だったことから、さらに、シメオンが燎原の火のごとく西方ロシア一帯を席卷する詩篇歌の流行を自ら記憶していた事実からも裏付けられる。実は、シメオンが耳にしたのはフランス・ユグノー派(カルヴァン派)の旋律で、これを同時代に歌集に取り込み、リトアニアや西方ロシアにあまねく拡散させたのはグダニスクの印刷業者 A.ヒューネフェルトだった。当然、こ

の地に蝟集するカルヴァン派信徒を顧客に期待してのことである。ただし、このポーランド語訳詩篇には、『ダヴィデの詩篇』の一部も僅かに紛れ込んでいる。これについて、J.ペルツは改作を含む都合 20 篇のコハノフスキ作品を確認している。

第 2 章と第 3 章ではこの『ダヴィデの詩篇』を取り上げている。そのパラフレーズを拒否する一方で、シメオンは自らこれを所蔵し、『韻文詩篇』の制作に当って、韻律上の組み立てで明らかにこれを参照した跡が認められるからである（VI の第 3 章、410 頁、注 39）。とはいえ、ここでは本作品自体の構造ではなく、その成立論を主要テーマとしている。それを確定させておくことが、以下の章で今度は『韻文詩篇』の意味論を問う上で、予想外に大きな示唆を与えてくれるからである。

本作品はもともとゴムウカの旋律が付けられる以前に書籍自体として高い人気を博していた。『ダヴィデの詩篇』の初版が刊行された 1579 年、時の新王ステファン・バートルィは、わざわざ詩人にリトアニアの首都ヴィリニウスにおける作品の復刻禁止令を授与している。これを詩人に発注したのはカトリック教会であるが、その期待にもかかわらず、作品は上梓直後に独り歩きを始め、これを十分に活用したのは実はプロテスタント教会だった。復刻禁止令はその可能性を十分に弁えた上での警告にほかならなかった。第 2 章ではテクストの特徴からその原因を探っている。結論として、「教会」を意味する語彙が詩人によって慎重に選ばれており、それがプロテスタントたちの琴線に触れ、活用しやすいものになっていたとの仮説を提起する。

一方、第 3 章では『ダヴィデの詩篇』の意味論を扱っている。作品は結果的に注文主のカトリック教会の意に添わぬものになってしまった。その汎神論的な世界観から改革派にもカトリック教会にも不満を表明せざるを得なかった詩人は、かねてよりその折り合いの付け方に苦慮しており、それが『ダヴィデの詩篇』の創作態度にも反映せざるを得なかったからである。現に、作品冒頭のパトロンへの献辞には、詩人自身、カリオペー（＝叙事詩の女神カリオペイア）への忠誠心を口にして、そのあまりカトリック教会からの制約には縛られたくない旨の気持ちを仄めかしている一節が認められる。作品が発注主の意向とは全く別のところで成立してしまっただけでなく、それでは、コハノフスキは、改革派のためでもカトリックのためでもなければ、そもそも何のために 10 年もの長きにわたって『ダヴィデの詩篇』の制作を続けたのか。論考では生誕間もないジェチポスポリータの宗教文化の特質からその意味を探っている。

第 4 章の主題は V の第 1 章のそれを補完するものである。ここでは西方ロシアにおけるポーランド語訳詩篇歌の流行の原因について、特に改革派と正教徒の交流関係を中心に記述しようとしている。とりわけ、同詩篇歌を「意味も弁えずに歌っていた」との正教徒たちの動向に注意を払う必要がある。なぜこの時代にそのようなことが起こっていたのか。それは、17 世紀の前半ともなれば、

改革諸派への弾圧も急を告げ、西方ロシア、ことにウクライナが、リトアニア以上に彼らの蝟集の地になっていたからである。因みに、改革派の間でとりわけ『ダヴィデの詩篇』を偏愛したことで知られるアリウス派は、リヴィウを含む赤ロシアを彼らのアジールとした。一方、この同じ詩篇歌は、シメオンによって首都モスクワでも聞かれていた。本論考では、これについても、詩人が具体的に首都のどこで聞いたのかについて、当時のモスクワ都市住民の居住状況から同定しようと試みている。

VIは本論考を締めくくる以下の4つの章より構成される。

第1章ではシメオン・ポーロツキイが『韻文詩篇』を著す以前の古代ロシア人と詩篇の関係について、その伝統や習慣について手短かに纏めている(ただし、ここで言う「古代ロシア」とはロシア語のドレヴニエールスキイの意で、実際には中世と近世を含む概念であるが、適訳がないので仮にこのように称す)。シメオンはかかる詩篇文化の伝統を踏まえつつも、これにまったく別の意味を与えようとしていたことが知られる。

第2章では『韻文詩篇』のテクストロギアを扱う。2006-2007年に実施したモスクワ国立歴史博物館(ГИМ)での調査結果に基づき、刊本、自筆草稿、ふたつの写本の内容を校合し、それを脚注で示したものが別巻資料である。論考はこれらを解読することで作品成立のメカニズムに迫ろうとしている。なお、ふたつの写本については、当初献上版として作られ、その後、上梓に当たってそのための基礎原稿に変じた写本をA写本、自筆草稿を浄書したと見做される写本をB写本と呼び、それぞれ独立した写本として区別する。校合の結果を開示する脚注においてもこの同じ略称が使われる。別巻資料巻末では対照表により、刊本を含む諸本間の依存関係を俯瞰する。

第3章は作品の成立要因を国内的なレベルで探求しようとしたものである。作品序文のひとつに古儀式派へのメッセージが認められることがひとつの重要な示唆を与える。前半では『韻文詩篇』の文体的特徴を検討する意味で、『ダヴィデの詩篇』のほか、教会スラヴ語訳聖書ならびにいわゆるラテン語訳ウルガータ聖書が収める各詩篇テキストとの比較を試みている。たびたび確認しているように、基本的にパラフレーズを拒否する『韻文詩篇』の特質が、ここには言語表現としてはっきりと現われており、この作品が『ダヴィデの詩篇』のような芸術的高みを志向するものでも、改革派のそれのように単なる文学的效果を狙ったものでもなかったことを示唆している。当然、そこには別種の、詩人固有の作為的な意図が内在していたはずである。その国内的な要因のひとつに対古儀式派戦略があったことは、作品自体が組み込まれた出版サイクルからも疑い得ないが、当面、それはどこまでも派生的な意味として捉えておくべきであろう。ロシアでは、現象としてのラスコールが、ウクライナの典礼改革に追隨した結果として起こっているからで、その同伴者たる詩人のまなざしも、当然、ひとりロシア正教会の運命とのみあったのではなく、一層大きな枠組みと

しての正教会の命運を見詰めていたと考えなければならない。

第4章では、ことに図像学と文献学の知識を活用して、『韻文詩篇』の成立に関わる意味論を展開している。問題解決へのヒントのひとつは、刊行テキストの準備のために献上本としての役割を早々に放棄したA写本の中にある(A、B写本の区別については前段の説明を参照されたい)。実は、この写本のタイトルページはふたつあり、ひとつはフォリオの判型に沿って綴じられ、もう一葉はこれよりも小さい型の紙に書かれたものが、最初のタイトルページに重ねられている。重要な点は、最初のタイトルページに記された刊行年が自筆草稿およびB写本と同じ1678年であるのに対して、新しいタイトルページでは刊本のそれと同じ1680年となっていることである。のみならず、ここには消去された別の刊行予定年の跡が幽かに認められ、新しい刊行年は、実際には同箇所を上書きされたものであることが断定される。消された年は文字の形状からも明らかに1679年である。これにより、『韻文詩篇』の上梓は都合3度企てられ、最終的に1680年に落ち着いたことが知られる。一方で、作品はシメオンの最大の自信作とも言える『にしきなす花園』の出版を一時棚上げしてまで刊行作業が続けられていた。当然、ここに大きな疑問が起こってくる。そもそも詩人は、この間、なぜこんなにも『韻文詩篇』の出版に拘り続けていたのか。この疑問は、手続き上一旦宙に浮いた形の『にしきなす花園』が、1678年の脱稿後もついに上梓に至らなかった事実によって一層深められる。

論の展開に大きな示唆を投げかけているのが、作品に収められたダヴィデ像である。よく知られた刊本のそれはシモン・ウシャコフが原画を描き、これが銅版画となって刷られたものが使われている。一方、刊本以外の諸本ではA写本(元献上版『韻文詩篇』)にのみ別の彩色されたダヴィデ像が収められているが、実は、この口絵は刊本のそれと意匠の点で著しく異なっている(この絵はニコンの改革前後にも何度か使われ、ダヴィデが脇目もふらずに詩篇を認める場面を写している)。つまり、A写本のダヴィデ像は、上梓に際して、その役割をウシャコフのそれにとって変わられたのである。なぜそのような差し替えが行なわれなければならなかったのか。疑問に答えるための手掛かりは、シメオンの別の作品で詩人没後の1680年9月に上梓された『ワルラームとヨアサフの物語』のタイトルページを飾る装丁の絵柄と、何よりも『韻文詩篇』自体の韻文で書かれた序文の中に見出される。前者は、タイトルページを中央に挟んで凱旋門の両脇に戦争と平和を象徴する兵士と乙女が立っている絵で、J.I.シードロフはこれにウクライナを主戦場とする対トルコ戦争の影響を嗅ぎ付けている。一方、後者の序文の一節では、若きダヴィデに擬せられるフョードル・アレクセーイェヴィチ帝と、片やゴリアテに譬えられるオスマン・トルコとの対立の構図が、一層はっきり浮き彫りになっている。ウシャコフ、つまり、その注文主たるシメオンは、これを投影して作られた新たな口絵によって、A写本のダヴィデ像には永遠に見出され得ないもの、すなわち、ダヴィデとゴリアテ

の主題を浮かび上がらせようとしているのである。祈りに没頭するダヴィデの傍らをふたりの兵士が歩いているのも、その顔の表情が極端に簡略化されているのも、すべてはその象徴化への配慮であろう。一方、『ワルラームとヨアサフの物語』のタイトルページの装丁は、これも同様にウシャコフの筆になるものであるが、画家が常にそうする習いの天地創造紀元による制作年の記載は 7188 年で、同じ 1680 年であっても、明らかに同年 9 月以前に完成していたことを示している。加えて、当の詩人はすでに 8 月に亡くなっているのもともたつた作品の制作時期は近く、その親和性は想像される以上に高かったのである（ダヴィデ像の原画は 1 月から 2 月、装丁画のそれは 5 月から 6 月の間と推論される）。因みに『韻文詩篇』はロシアとオスマンが初めて干戈を交えた年の翌 1678 年に慌ただしく草稿が完成、その後の粘り強い改稿を経て両国が休戦条約に至る 1681 年の前年 1680 年の 4 月に上梓されている。

締め括りに、本論で幾度か引いた作品序文におけるポーランド語訳詩篇歌についての詩人の回想であるが、注意深く読めば、これにはいわば西方ロシアを席卷する同詩篇歌への詩人の憧憬の如きものが吐露されていたと考えられよう。けだし、シメオンの『韻文詩篇』は、序文の記載などからも、単に国内向けのみならず、今後オスマンのために流民となる運命（さだめ）の同胞スラヴ人正教徒たちのものでもあった。とはいえ、立場上護教的な姿勢を崩すことができず、原則としてパラフレーズが許されないシメオンの作品は、せいぜい教会スラヴ語訳テキストに律動を加え、唱えやすい形式を纏わせたものに止まった。後にトレジアコフスキイがシメオンの作品について評したのはこの意味においてであった（が、散文による序文の一部をアポリナリオス（4 世紀の異端派）以来の伝統から説き起こしてはその度に削除しなければならなかった当のシメオンは、自らも東方キリスト教世界における同分野の先駆者のひとりとなることを切望していたと考えられ、生前その一角で辛うじて上梓できた『韻文詩篇』に最大限の安堵と矜持を覚えて逝ったのではないか）。

巻末にシメオン・ポーロツキイ年譜、引用文和訳、「あとがき」、参考文献一覧を付す。